

初代笠亭仙果年譜稿

——補遺(下)——

石川了

過去四回にわたって整理してきた年譜稿も今回を以て終了とする。本来ならば前回の補遺(上)に引き続き、今回は弘化年間から始めるべきであるが、それ以前の追加項目も出てきたので、今一度すべて年代順に記すこととした。

文政四年

辛巳

十八歳

▲六月 佐藤友直八絃らと月番の歌合を始める。

『題作文稿』所収「佐藤八絃主家文政七年二月 日哥の集始の日にかける序文」に、「月番の哥のつとひすることは文政の四年といふとしの水無月よりなんはしまりぬるを」とある。その面々については記されていないが、文会の顔ぶれと同様と思われる。

文政五年

壬午

十九歳

▲九月二十日 文会が行われ、仙果も文章を作る。

『題作文稿』による。「去年九月廿日文会に紅葉を題にて作れるおの／＼の文」として、栗田栗生(千壱)、鏡味貞厚、長岡豊足、佐藤八絃、貝谷良全、高橋広道(次房)の文章が記されている。「去年」を本年とするのは、文政六年正月二十八日の文会の文章に続いてこの文会記事があることによる。

▲十月二十七日 文会が行われ、仙果も文章を作る。

『題作文稿』による。「同し(去年)十月廿七日文会に海辺眺

望を題にて作れる各の文」として、栗田千壱、長岡豊足、鏡味貞厚、佐藤八絃、森田松雄、高橋次房の文章が記されている。「同し(去年)」を本年とする理由は、前月文会に同じ。またこの折、仙果は「寄水恋」の題で作文を試みたができなかったことも見えている。

○十一月四日 佐藤八絃主家縣居大人影前会における懷紙短冊を集めて序を記す。

『題作文稿』に「文政五年といふとしのしもつき四日の日」として記されている。それによると、十月晦日は加茂真淵の命日で、仙果ら集まった人々は書という題で歌会を開いている。またその場の市岡孟彦から、真淵はさつまいもを好んだことを聞き、さつまいもの五字を句の上に置いて歌を詠んでいる。

※同月十五日 栗田千壱、大坂から仙果宛に文を送る。

『題作文稿』による。日付「霜月十五日」。「こは大坂に(千壱が)をられし時おのれかもとへ作文をおくられし時の消息の文也但し去年也」とあって、文面中に本年九月二十日の文会に関わる記述があることから本年のものと思われる。なお、続けてこれに対する仙果の返事(月日不明)も掲載されており、その末に「そへて申君ゆかせ給ひてよりはさらてもおろかなる学の道たれも／＼おこたりにちなん一日もはやうかへり給へかし」とある。

▲同月末 文会が行われ、仙果も文章を作る。

『題作文稿』による。「去年霜月の末の文会に埋火を題にて作れる各の文」として、森嘉基、長岡豊足、佐藤八絃、高橋次房の文章が記されている。「去年」を本年とするは前述に同じ。続いて「同じころ物語を題にて」として、森嘉基、佐藤八絃、高橋次房の文章があり、次いで「寄雨恋」と題する次房の文章がある。

▲立春 長岡豊足に文を送る。

『題作文稿』に「長岡豊足主へおくれる文（但し去年立春の月也）」として記されている。年の内の日数わずかになっての心境などを述べている。

文政六年 癸未 二十歳

▲正月二十八日 文会が行われ、仙果も文章を作る。

『題作文稿』による。「文政六年」「正月廿八日文会始に早春を題にて作れるおの／＼の文」として、栗田千壘、長岡豊足、藤原（佐藤）八絃、貝谷良全、高橋次房の文章が記されている。次いで「同じ日の夜探題にて作れる文とも」として、藤原八絃（夕春雨）、栗田千壘（恋愛喜）、高橋次房（寄画恋）、長岡豊足（羈中山）の文章がある。

▲四月十三日 文会が行われ、仙果も文章を作る。

『題作文稿』による。「四月十三日文会にあはれる物ハを題にて作れるおの／＼の文」として、鏡味貞厚、長岡豊足、藤原八絃、貝谷良全、森田松雄（多頼）の文章が記されている。次いで「同じ日探題にて作れる文とも」として、鈴木腹（子日）、森田松雄（師二）、佐藤八絃榊園（江螢）、鏡味貞厚（秋の田）、よしまる（夕月）、長岡豊足（夜雪）、高橋次房（恋衣）、同（嶋鶴文政乙酉（八年）作頃セリ）の文章がある。

▲是歳 茂松園の父の五十の賀に歌を送り文を寄せる。

『題作文稿』による。「茂松園主の父君の五十賀に哥おくりた

るとき詞」として記されており、文中に「文政六年といふとし」とある。

文政七年 甲申 二十一歳

※二月二日又はこの前後各一年の同月日 栗田千壘、仙果に文を送る。

『題作文稿』による。「この消息はおのれこの主（千壘）に藤原真通主の哥会にいてんとてその兼題の哥の評をこひし時の返書なり」として記されている。日付「きさらき二日」。『題作文稿』は文政八年十月の序で、文政五年から同八年までのものを集めているから、右三年間のうちの二月二日の文である。

▲同月十六日 文会が行われ、仙果も文章を作る。

『題作文稿』による。「文政七年二月文会十六日に鶴を題にて」として、長岡豊足、佐藤八絃（真水）、貝谷良全（靖葬）、高橋広道の文章が記されている。次いで「同日当座探題にて」として、佐藤八絃（絵にかける女）、長岡豊足（暁の秋の月）、高橋広道（よき女のなやめる）、貝谷良全（花のかけに休に山ひと）の文章がある。

▲同月 佐藤八絃主家での今年最初の歌合に行き文をしたためる。

『題作文稿』による。「佐藤八絃主家文政七年二月（乙未）日哥の集始の日にかける序文」として記されている。本年も予定では一月に「鶯万春の友」という題で行うはずであったが、変更されて二月になったことなどが記されている。

▲四月 文会が行われ、仙果も文章を作る。

『題作文稿』による。「文政七年四月（丁丑）日伝の類の文をあつむ」として、鏡味貞厚（伝類之詞）、長岡豊足（歌といふ人の伝）、（作者名なし）（芳野住人陀羅助之伝）、森田松雄義名（亀の伝といふ事をたはふれて）の文章が記されている。仙果の

文章については「広道か兼題の文別にあり」とのみ。次いで「同日当座」として、藤原八絃（春といふ題にてかける文）、長岡豊足（夏といふことを題にて）、森田松雄（秋といふことを題にてかける詞）、高橋広道（旅といふ題にてかける文）の文章がある。またことは別の所に「文政七年四月の会の当座に」として、鏡味貞厚の「ほきことゝいふを題につくれる詞」という文章が掲載されている。

▲六月二十一日 文会が行われ、仙果も文章を作る。

『題作文稿』による。「文政七年六月文会兼題に」として、高橋広道（神世美布見翁伝）の文章があり、次いで「六月文会に^廿」納涼を題にてかけるおのゝのふみ」として、鏡味貞厚、長岡豊足、佐藤榊園、森田多頼、高橋次房の文章がある。なお榊園と多頼の間に「石水撰」として漢文の文章が入っている。さて次いで「同じ日探題につくれる文とも」として、森田松雄（月）、鏡味貞厚（題名なし）、高橋次房（懐旧）、長岡豊足（わかれ）、貝谷良全（文）、榮樹園（琴）の文章がある。

▲七月 佐藤八絃と肥国人山田救安に文を送る。

『題作文稿』による。「文政七年七月^三」日佐藤八絃主と肥国人山田救安かもとへおくりける」として記されている。掛取りが払わねば畳でも茶釜でも取っていくといっていることなどが記されている。また貝谷良全方へ水滸伝と源氏の年立てを貸してほしいと伝えたことなども見えている。次いで良全に源氏の年立てを返す文があつて、「この比のさむさ身もさるゝはかり」などとあるから、冬になってから返したものであると思われる。

▲八月十四日 文会の面々寄りあい、艶書を集めてその返しを書く。

『題作文稿』による。「八月十四日艶書をあつめそれに当座にてかはるゝかへしをかきけるその文とも」として、鏡味貞

厚・森田多頼（返し）、長岡豊足・高橋次房（返し）、藤原八絃・貝谷良全（返し）、良全・八絃（返し）、多頼・（返しなし）、次房・豊足（返し）の各文が記されている。

▲十月 文会が行われ、仙果も文章を作る。

『題作文稿』による。「十月文会に残菊を題にて作る各のぶむ」として、鏡味貞厚、長岡豊足、佐藤八絃、高橋次房の文章が記されている。次いで「同日探題にてかける文とも」として、八絃（弓とるますらを）、豊足（琴ひくうなゐ子）、貞厚（酒のむわかひと）、次房（仏いつくうは）の文章がある。

▲十一月 文会が行われ、仙果も文章を作る。

『題作文稿』による。「十二月文会を十一月^三」にせし時の文神を題にて」として、長岡豊足、藤原八絃、高橋次房の文章が記されている。次いで「同日探題にてかける文とも」として、八絃（冬月辞）、次房桃の屋（水鳥をかける文）、豊足（雪）、貝谷靖算（早梅）の文章がある。

▲冬至 早梅の文章を作る。

『題作文稿』による。「早梅^{佐藤八絃主家の書画会の小集とて冬至にせられける時につくれる文}」として記されている。この文章のすぐ後に文政八年春と思われる文章が続いていることからして、その前年冬の作であろう。

文政八年 乙酉 二十二歳

▲春 柳、初風呂の文章を作る。

『題作文稿』による。それぞれ「柳^{文政七年作改名}」「初風呂^{なにか文ともあつめたるかきのかたちといへる書のかきたる題につくれる世}」として記されている。柳、初風呂の順で記されていて、そのすぐ後には本年初冬の文があるので、この二つの題の文は本年春であろう。ただし「柳」は前年作を本年になつて名のみ改めたか。

▲六月十九日または同六、七年の同月日 貝谷良全のところから長らく借りていた須磨琴を返すに当って文を記す。

『題作文稿』による。「貝谷良全主のもとにてすま琴をかりて

久しうとめ置つゝかへすときの消息」として記されている。終りに「水無月十九日」とある。掲出年月日は、文政八年十月序の『題作文稿』が同五年秋から同八年までの文を集めていることによる。

○同月二十七日または同六、七年の同月日 鏡味貞厚の『をとめの俳優』に跋を記す。

『題作文稿』による。「鏡味貞厚主かかけるをとめの俳優（堀のにきはしきことを此「巻に物したるなり」の跋として記されている。終りに「水無月廿七日」とある。右の年月日の掲出理由は、前条に同じ。）

▲同月または同六年の同月 文会が行われ、仙果も文章を作る。

『題作文稿』による。「名所を題にて六月（マ） 日文会しける時のおのくの文」として、鏡味貞厚、長岡豊足、佐藤八絃、森田多頼、高橋広道の文章が記されている。次いで「同日当座の文」として、貞厚（うれしきもの）、豊足（にくき物）、八絃（めてたき物）、多頼松雄（なまめかしきもの）、広道（きたなけなる物）の文章がある。なお、右年月の掲出は、文政八年十月序の『題作文稿』が同五年秋から同八年までの文を集めたものであり、同七年は六月に別に文会記録があることによる。

▲十月上旬 掛け取りの文を作る。

『題作文稿』による。「かけ取り（同上「初風呂」に同じ）」として記されている。『題作文稿』は本年十月十二日序であることからすれば、上旬の作ということになる。

○是歳前後 狂詩文『寝惚先生文集（初編）』に書入れ、朱点を施す。

東京都立中央図書館加賀文庫本（明和四年版）がそれで、表紙に「鼠室主人蔵戲評」、見返しに「鼠室主人評」とそれぞれ墨書。年代の記述はないが、本年正月に仙果は唯一の狂詩文『泥鵬台文集』を刊行しているので、この書入れも本年に離れること遠くはないであろう。本書の存在、揖斐高氏の御教示

による。

文政十一年 戊子 二十五歳

▲是歳 田鶴丸と狂歌の合作をする。

細野要斎の『感興漫筆』明治十年六月十二日条によれば、この日、小寺玉晁はある所で購入した懸幅を持って要斎を訪れている。一つは西来居末仏の狂歌であるが、いま一つについて、要斎は「又一幅合作の内」として次の狂歌二首を記している。誘れて老もわかきに帰り咲小春に開く花のむしろは

七十叟 田鶴曆

いにしへのはりこのとらもおもひいでぬつきのねずみにおはれゆくみは 仙果

田鶴曆は天保六年十月六日に七十七歳で没しているので、七十歳といえは本年ということになる。

天保二年 辛卯 二十八歳

※四月四日 柳亭種彦、熱田の仙果に書簡を送る。

「集古」（乙丑第五号）所収。日付「四月四日夜」。文面には種彦の病氣も快方に向っていることなどが記されており、「此手がミタのミ候人は柳樽にて御ちかづきの佃嶋佃子に御座候」とある。また佃子は大和、四国を巡って初秋頃帰る予定であることも記されている。佐藤悟氏の御教示によれば、書面中の「当地（江戸）にて法度の事女浄瑠璃なり」とあるのは天保二年二月十九日に出された禁令をさす（『徳川禁令考』巻五十）とのこと、よって本年の書簡である。

天保三年 壬辰 二十九歳

※冬の十一日 柳亭種彦へ書簡を送り、種彦も熱田の仙果に返書を送る。

『かくやいかの記』（『随筆百花苑』第六卷所収本）百二十六条に引かれている種彦返書中に、「十一日出の御状今夕相届申候。南里子の手紙御世話たしかに落手」（戯作の）種につか

ひ候あとか猶見たいとは甚よき御心がけ也」などとある。本年冬とするのは、書面中に「当暮のうち」とあり、また春の夜がたりを武道三国志を利用して書いたとあって、これが天保三年春刊行の種彦の合巻『花桜木春夜語』をさすことによる。この書簡、長谷川強氏から御指摘いただき、年代推定は佐藤悟氏の御教示による。

天保四年

癸巳 三十歳

▲冬の十八日 名古屋で平出順益に書簡を送る。

「手紙雑誌」(第七巻第三号)及び『鏗痴集』所収。日付「十八日」。順益所蔵の珍書「舞のさうし」を筆工に写させていること、種彦が順益及び永坂平器の蔵書目録を見たいと言っていること、『修紫田舎源氏』十三編序に種彦が順益所蔵の「花鳥風月のさうし」の考案を載せたことなどが記されている。『田舎源氏』十三編(天保五年春序)について「近内売出し次第御一覽被下候」とあることや「おひ／＼寒氣に身がいり申候処」とあることから、本年冬の書簡であろう。

天保五年

甲午 三十一歳

○是歳 評判記『たきつけ草』を書写する。

東京都立中央図書館加賀文庫蔵(延宝五年版)。「もえくゐ」「けしすみ」とともに一冊となっている仙果旧蔵本で、『たきつけ草』のみ仙果の書写、他は版本である。見返しに朱筆で「延宝五年より数へみるにことし天保五年まで百五十八年のむかしなりいまもむかしもいさゝか人情にかはりはなしまして廓のさま都もひなもむかしも今もすこしもたがはず」とある。

天保六年

乙未 三十二歳

◎七月 狂歌『紅叢紫籙』一冊が刊行され、一首入集。

左方撰者黒河春村、右方撰者村田元成。勝田諸持序、鈴木其一画、春村添詞。奥に、
文棲浅茅生 輯
天保六年乙未孟秋彫成 川佐広好 書

江川道守 刀

とある。

折花贈人

君をまつほとにかくまてうつりぬと恨ミかてらにをりし桜そ

熱田仙果

天保七年

丙申 三十三歳

▲四月十六日 名古屋で平出順益に書簡を送る。

『鏗痴集』所収。日付「四月十六日」。江戸へ出かける直前のもので、「今般家内へも密々に而江戸表へ罷り下申度」「江戸下り一件人がしり候ては万端不都合故」などとあるが、その理由については「種々深き訳合もあり」と記して具体的には述べていない。江戸へ出かけるに当り、自分の蔵書を順益に預かってほしいことなどが記されている。仙果の江戸行きで四月に熱田を立っているのは本年のみなので、本年の書簡であろう。

◎是歳 黒川春村撰、狂歌『着到十首』が刊行され、「高橋広道撰」の部を収む。また二十四首入集。

四巻(春夏秋冬の各巻)四冊所見。各巻原題簽に「天保七」と刻されており、巻頭いずれも「黒河春村選」とある。

巻一(春)

初春霞

むらさきにあけにみとりの袖のいろもけふハかすミにつゝく
こゝのへ 広道

山家梅

うくひすも都へゆきて山里ハうめにのミこそ春めきにけれ
広道

暮春鶯

きかまほし春もいまハのうくひすハ初音めてにし折にまさり
て 広道

かへるにハしかしとなかぬ鶯も古巢へいそく春のくれかな

同

卷二(夏)

朝更衣

あさ宮にめさるゝ雲のうへ人ハをしむまもあらし花そめの袖

広道

朝寝してまなふたおもし夏衣かふる袂ハかるきものから

同

池菖蒲

おほ沢の池のあやめにつミそへん蓬に似たる菊のわか葉も

広道

大かたハ汀のあやめひきはてゝあらハになりぬこやのいけ水

同

当座 ひのと

高橋広道撰

郭公こゑのにはひのときしくにかくのこのミとかをりあハな

光枝

このよから闇にまよハん鵜つかひのともすかゝり火もえつくる夜ハ

守弘

さミたれの空ハちかきを郭公までとおもひのとゝかぬやなそ

春村

難波かたきのふハもゑしあしかひのとかまとるまでしける比

同

月きよミしたまつよひのとくにけてあくれとなかぬほとゝき

広道

す哉

当座 つちのえ

桜井光枝撰

ミるかうちに空かきくもるゆふたちハミつちの江よりのほる

広道

なるらん

卷三(秋)

七夕船

雨と見てこゝになくも天の川とわたる舟のかいのしつつか

広道

天の川こよひの星のふな出にハ月もかつらの梶やかすらん

同

たなはたの袖かわくらんこきわたるあけのそほふねそほぬ

同

るゝ夜ハ

同

野外霧

しめゆハぬあら野のこはき風に敷てまハラになりぬ露の籬も

広道

かきりなき露のまかきをゆひそへてぬしなき野への花もをら

同

庭前菊

ひんかしの籬のきくハ咲にけり雨ふく風よからさすもかな

広道

わすれけり千代見菊を庭にうゑていとゝかなしき秋のおもひ

広道

卷四(冬)

川水鳥

なミた川浪にうきねのをし鳥ハ身さへなかと妻にたのめん

広道

さそふへき水もこほれる川瀬にハつまなきをしのいとゝなけ

同

ちりはてしあと川遊あとゝへはなかるゝ鴨の羽そミとりなる

同

歳暮雪

まなふ間もなくてことしも暮にけりふミよむ窓の雪やうとま

広道

いたつらにすくなければと雪の花見つゝくらさん年のはてか
ハ 同

当座 ミつのえ

村田元成撰

かきくらし雪ハふるとも駒はなつ此野ハ美豆野えやハまよハ

広道

天保九年

戊戌

三十五歳

※九月 尾張の耽古社連、延宝八年の「よし原ひやうばん」を摸
刻（一枚刷）する。

信多純一氏が「師宣慕效——延宝三年江戸四座役者付考」（『文学』昭56・

12）でその写真とともに紹介されている。梓外に「原図森川

氏所蔵」天保九年戊戌九月摸刻配進于江湖好古君子百枚限滅

版」と刷られている。また右上角に「尾張国／耽古社／八天

狗」の角印があり、そこには「^{延宝}よし原ひやうばん摸図／尾

張耽古社中蔵」と印刷された一葉の貼紙があるという。耽古

連は小寺玉晁の『人物図会』によれば、平出亀寿（順益、永

坂平器（周二）、松雄屋千瑣（新兵衛）、天竺花老人、松井蒼

龍（武兵衛）、水野醉讀亭（三四郎）、中西龍雄、小寺玉晁の

グループをいい、「右八天狗ト称」とあるが、『名古屋市史』に

よれば、初め仙果、玉晁、平出、永坂、松尾屋でグループを

作り、仙果江戸へ出た後、右の残る四人が加わって八天狗耽

古連中と称したという。本年はまだ仙果は居を江戸に移して

いないことからすると、仙果を含めて耽古連八天狗（かわり

に右八人のうちの誰か一人が未加入ということになるが）と

称した時期があったとも考えられる。

天保十二年

辛丑

三十八歳

○春頃以前『絵巻物通覧』一冊執筆。

静嘉堂文庫蔵。東大寺宝物等の図や絵巻物の詞書等を集めた
もの。本年夏頃執筆の『尚古雜撰』に本書が引かれているこ
とからここに掲出する。

天保十三年

壬寅

三十九歳

○春『四季島台』の序を記す。

本書刊否未詳。『よしなし言』十一編に「壬寅春」として記さ
れている。

弘化元年

甲辰

四十一歳

○冬『妓院文書妹背の橋立』の序を記す。

本書刊否未詳。『よしなし言』十編に「辰冬 千歌書」として
記されており、後に「ふみかよふいくのゝ道のしをかともな
れやいもせの中の橋立」の詠を付す。

弘化二年

乙巳

四十二歳

▲十月四日 文会が行われ、仙果も「菊説」の題で文章を作る。

『よしなし言』十一編に「菊説浅井庸か家文会十月四日」として記され
ている。

弘化三年

丙午

四十三歳

○正月二十七日『三代実録校異』一冊を鈔写する。

東北大学狩野文庫蔵。外題「三代実録校字」。表紙の間紙には
「百人伝彙」^{目録}_{引用書目} 首巻」と墨書された用紙が使われている。
奥書左の如し。

安永八年八月十一日以文庫之本校訂終業焉宇治五十槻久

老／右三代実録卒巻以蘭渚内田宣経所蔵荒木田久老校本年

月校正卒／文政九年丙戌二月二十七日卒業尾張名古屋清水

太左衛門宣昭／右以神谷伝右衛門本鈔了 弘化三年丙午盛

春念七日夜 高橋広道

▲二月二十五日 江戸に居を移すため熱田を立つ。

このことは年譜本編にすでに掲出したが、これ以前を仙果の
熱田時代と呼ぶことにすれば、年代未詳の熱田時代の書簡五
通がある。

○四月十三日付平出順益宛書簡（『鏗痴集』所収）

○三月十日付伊藤圭介宛書簡（国会図書館蔵）

○八月九日付同人宛書簡(同)

○十月三十日付同人宛書簡(同)

○十二月二十一日付同人宛書簡(同)

なお、江戸表ではしばらく黒川春村宅でその世話になっていたが、小寺玉晁の『人物図会』等が伝えるところの、仙果が堀内匠頭家求となったというのも春村の世話であろう。森潤三郎氏「花巻屋堀内蔵頭直格」(『日本古書通信』昭13・1)によれば、直格の著した『扶桑名画伝』五十三巻、『ゆめのたち』一卷、『三種神符考』一卷、『三霊図考』一卷などの背景には、事に当った春村の大きな尽力があったようである。そうした春村の紹介によるものであろう。

◎是歳以前、黒川春村撰、狂歌『波奈加多美』四巻四冊が刊行され、巻一に五首入集。

所見本年代の記載がない。仙果が江戸へ出る前の、それも天保後半あたりの刊行と思うが、とりあえずここに掲出する。巻一は春の巻で、巻頭に「黒河春村選」とある。

春花

雪なからつミしおもかけ又ミえてかきねのなつな花さきにけり

広道

春の野の萩の焼生のすみれくさあきハわか為にはへとやさく

同

をさな子かつらぬきとむる玉椿ちりての後もいろをめてつゝ

同

をしけれとかさしの桜衣手にちるハあかすそうれしかりける

広道

さくらかり柏はしさへあるものをくれなハなけしの隅田川か

同

弘化四年

丁未

四十四歳

▲正月 江戸表の新春を初めて体験し、その様を記す。

『よしなし言』十二編による。「弘化四とせの初春この江戸のとしのはしめのさまおのれはじめて見る」として、故郷熱田と大いに異なる様子を記している。

○春 柳下亭種員に代って一文を草す。

『よしなし言』十二編による。歌人俳人の画像、略伝などを集めた、いわゆる異種百人一首のような書の序文らしく、刊行を前提とした文面である。終りに「弘化四年春 柳下亭種員にたのまれて代筆せし也」とある。

嘉永元年

戊申

四十五歳

◎是歳以前 鼎札「浅草山谷堀山川街八文字舎源兵衛柳橋大のし」に、他の戯作者たちとともに賛辭を寄せる。

「本道案」第二十一巻四号所収。三亭春馬が八文字舎自笑源兵衛(舖三玉堂)と改号した折のもの。本年十一月六日に没する著作堂の名も見えていることから、本年以前ということになる。

仙果流れわたりもいと清く心も濁らぬすみた川

とある。他に見えているのは、立川焉馬、山東庵、柳下亭種員、星子鬼笑、万亭応賀、松亭金水、榮亭西馬、豊芥子、花笠文京、玩玉亭文英、立亭京楽、式亭小三馬、五柳亭徳升、為永春笑、為永春水、文亭梅彦、墨川亭雪鷹。また、国芳、広重、英泉、卅等九人の画工が浅草名物を合作したものがあるという。

嘉永三年

庚戌

四十七歳

◎正月 合巻『今様伊勢物語』八編刊。

表紙に「庚戌太簇」とある。「庚戌新刊 笠亭仙果」序。貞秀画、松寿堂大黒屋平吉板。本書七編の項(年譜本編嘉永二年「是歳」の項)で八編未見としたが、向井信夫氏御所蔵本と新収の本学所蔵本にて確認した。

嘉永四年 辛亥 四十八歳

○二月二十日 写本『身のかたみ』一冊に識語、書入れを施す。国会図書館蔵。奥に「天正八 壬 三月初六 藏人右中弁藤判」とある写本で、仙果の朱筆による校合等の書入れがある。末に「嘉永四年 癸亥二月廿日夜以群書類従校合注異同了 高橋広道」と朱書。

○是歳以前弘化四年以後、『地口画手本』一冊刊。

岡雅彦氏の御教示による。国文学研究資料館蔵。外題は書名末に「初編」が付されている。見返しに

笠亭仙果戲著 式篇三編 追々出版
地口絵手本 初篇全一冊
一立斎広重狂画 東海堂梓

とある。序なし。東海堂は尾州永楽屋の江戸出店、永楽屋文助。「笠亭仙果」序。刊行時期は「馬込」「福」の改印による。

嘉永五年 壬子 四十九歳

○春 合巻『今様伊勢物語』十編刊。

表紙に「壬子春新刊」とある。「嘉永壬子開春吉祥日 笠亭仙果」序。貞秀画、松寿堂大黒屋平吉板。本書九編の項（年譜本編嘉永四年「正月」の項）で十編未見としたが、八編同様二本にて確認した。

○八月 往來物『女用文章袖硯』一冊刊。

見返しによれば、笠亭主人纂補、栄久堂山本平吉板。所見本年代の記載がないので、刊年月は『往來物系譜』（日本教科書大系往來編別巻）による。序なし。

○十一月 仙果の撰による大錦絵「八犬伝犬之草紙」刊。向井信夫氏の御教示による。

大錦絵 八犬伝 板 横川竹次郎 画 歌川国貞
木 津下庄次郎 撰 笠亭仙果
師 須川千之助

とあり、「嘉永五壬子年十一月吉日」とある。紅英堂蔦屋吉蔵板。故人を含む役者四十九人の見立てと右一枚計五十枚から成る。

○是歳 教訓物『実語教雅絵解』一冊刊。

『国書総目録』によれば、本年に笠亭主人作、五雲亭貞秀画として刊行され、書名に「絵入講釈」と角書があるというが、所見の熊谷市立図書館所蔵本には、作者名画工名刊年（改印も）ともに記されていない（角書に異動はない）。序なし。見返しに印刷が全くないところからすると、仙果と貞秀の名及び刊年をここに刻した本があるのであろう。所見本栄久堂山本平吉板。安政再版本（無窮会平沼文庫蔵）があるが、この本は角書を「安政再版」と改刻し、見返しには「橋本蘭斎註釈／五雲亭貞秀画」とあって、やはり仙果の名は見当らない。版元は熊谷市立図書館所蔵本に同じ。

○是歳または前年 咄本『新撰おどけ一口はなし』一冊刊。

袋に「仙果聞書」「英泉戯画」とある。また柱にも「英泉狂画」とある。「新春の発兌にせばやと楓川の市隠 一筆庵」序。版元名も柱にあり、東海堂永楽屋丈助板。巻末の「稚源氏東国初旅」広告を見るに、「初編より四編まで去戌（嘉永三年）冬迄発行、五へん六編当秋より売出し候」とあって、五編は本年十月に刊行されているから、「当秋」の年は掲出兩年のいずれかである。

○是歳以後 合巻『稚源氏東国初旅』の初編から五編までを改題改竄した『義経雅源氏』初、二編刊。

鈴木徳三氏より御所蔵本をお見せいただいた。元本三編上までの五十丁が初編に当り、新たな十丁と元本四、五編とを以て五十丁にしたのが二編である。原本五編が本年十月の刊だから、この初二編の刊行は当然それ以後ということになろう（初編は原本三編が出た嘉永元年の刊とも考えられるが、それ

では二編との間があきすぎる。版元は刷付表紙に「吉文板」とある。

嘉永六年 癸丑 五十歳

◎正月 地誌『大江戸図説集覧』一冊が刊行され、仙果序を記す。右は年譜本編に掲載済みだが、別に明治刷りがあることを知った。刊年の記載はないが「和漢図画出版發行所」として〔發行所〕松山堂 藤井利八〔印刷所〕松山堂出版部 松雲堂書店とある。

◎同月 切附本『がつばう一代記』一冊刊。

向井信夫氏の御教示による。刷付表紙に「がつばう一代記 仙果作 国郷画」とある。内題「鬻貌復讎録」。序なし。末尾に「此書也賈人急発兌不經校訂而命彫刻々成之後見之筆工杜撰錯用字法格者不建枚挙雖然細小文字難改刻徒嘆一口氣而已仙果再記」とある。刊記「嘉永六癸丑春正月發行」。米林堂竹屋次郎吉板。

◎同月 『和漢忠孝百人一首』一冊刊。

刷付表紙に右書名の他「仙果作」「貞秀画」とあり、末尾には前条『がつばう一代記』と全く同じ漢文があつて「仙果再記」で結んである。刊記「嘉永六癸丑春正月發行」。序なし。米林堂竹屋次郎吉板。柱「忠孝」。改印は「浜」「馬込」「丑正」の三印。全三十七丁（最後の丁付五十五）。本書改題改竄本に「和漢忠孝八十人一首」一冊がある。元本刷付表紙の書名の「百」のみを「十」と改刻。柱「忠孝」。改印は三印とも元本に同じ。全三十九丁（最後の丁付四十）。所見本版元名を欠く。なお「和漢英雄百人一首」（安政六年又は万延元年刊）もこれの改題改竄本である。

◎同月 『武稽百人一首』一冊刊。

所見本年代の記載がないので、「浜」「馬込」「丑正」の改印三印によって掲出する。本書は松亭金水の『本朝武芸百人一首』

（嘉永四年春自序、同年七月米林堂刊、清水芳玉女画、口絵為斎画、改印なし、柱「武芸百首」）の金水序を仙果のものに差しかえたものであることが、伊藤嘉夫氏「武家百人一首と其の類列の百人一首」（『跡見学園短期大学紀要』七八合併集）によってすでに指摘されている。笠亭仙果自序。画工は口絵に「為斎画」とあるのみだが、本文は芳玉女の画ということになる。書名は元題答による。発行書林は、須原屋茂兵衛から山口屋藤兵衛まで十二名を連記する版（加賀文庫、狩野文庫）、河内屋茂兵衛から山口屋藤兵衛まで十三名を連記する版（跡見学園短大、上田花月文庫）、須原屋茂兵衛から江戸屋庄兵衛まで十五名を連記する版（金刀比羅宮図書館）などがある。柱「武芸百首」（本書を「武芸百人一首」と別称することが『国書総目録』に出ているが、それらの本はこの柱によるのであろう）、全五十五丁（丁付に乱れはない）。なお『笠亭仙果文集』には本書の序文を「和漢忠孝百人一首序」として記しているが、仙果の誤認か。また宮武外骨氏「川柳と百人一首」付録「異種百人一首総目録」では、本書安政四年刊とするが、未確認。

※春 福は内うち豆作の『江戸すなご細撰記』が刊行され、「著述屋戯三九」の項にその名が出る。

向井信夫氏の御教示による。刊記「嘉永六年癸丑之歳春 王屋面四郎藏板」。「著述屋戯三九」の項に京山、文京に次いで「仙果」とある。なお「国学屋和哥藏」「狂哥屋笑九郎」の各項にはその名は見えない。

◎九月 切附本『金毘羅利生記』一冊刊。

所見の三康図書館所蔵本には年代の記載がないので、「浜」「馬込」「丑九」の改印によって掲出する。刷付表紙に右書名の他、「仙果作」「国郷画」とある。「合一堂主人」序。柱「たみや」。米林堂竹屋次郎吉板。

○秋 雑著『おし花』編数不明編（ただし二十三編から二十七編のうち）一冊執筆。

引用書目左の如し。『出羽風土略記』『奥羽観跡聞老志』『三河雀』『釈氏蒙求』『夢遊草』『夢想兵衛胡蝶物語後編』『北米利堅合衆国考』『画図西遊譚』

なお本編は柱に「書目」「鑪室蔵梓」と刻された。野の刷り込まれている用紙を使っている。

安政元年

甲寅

五十一歳

◎正月 合巻『今業平昔廻面影』六編刊。

向井信夫氏に御所蔵本をお見せいただいた。「嘉永七年瑞月笠亭仙果」序。刊年月はこれによる。芳虎画。五編までは甘泉堂和泉屋市兵衛板であるが、本編には版元名が見えない。後刷か。下巻末に「絵本二十四孝／はんし本二冊／さいしきずり／仙果えらむくによしゑがく／ちか／うり出し申候御ひやうばん／御もとめ下さるべく候」と予告するが、刊否未詳。なお年譜本編の嘉永五年「正月」の項で、本書六、七編刊否未詳として五編が最終編のように記したが訂正する。

▲○二月 友人とともに神奈川に出かけ、その折のことを『あやしの夢語』一冊に綴る。

同書によれば、名本園、新水らとともに船で神奈川に向い、知り合いの船宿「槌屋」に泊っている。折しも浦賀にペリーが来ており、同書もまたそれに関する内容が多い。出発した日付は名記されていないが、本年頃成立の『平穩録』に「嘉永七寅年二月五日六日東海道神奈川宿客舎」於て（神奈川見聞録）の抜書を（記）とある。二月初めの頃のことであったろう。『あやしの夢語』では、江戸へ帰るといふ頃になって、今日は横浜で米兵の葬礼があるがその米人は艦船上で昨日死去した。とある。『ペリー日本遠征随行記』（『新異刻叢書』第八巻所収）によれば、横浜での葬礼は本年二月十一日のことで

あった。結局一週間ほど神奈川に滞在していたらしい。

◎四月 切附本『三庄太夫読切話』一冊刊。

刷付表紙に右書名の他、「国芳女登里画」とある。また見返しには「尾陽狗々山人録」「歌川登利女画図」と見えている。「嘉永七^{甲寅} 麦秋 狗々山人」序。序文中に、「こゝに鈔録するハ梅暮里谷我翁の柴枯物語にて潤色」という。所見の三康図書館所蔵本は版元名を記さず。

▲閏七月十八日 父没。

このこと、すでに年譜本編掲出済みで、その折に「この頃ひとまず熱田へもどっている可能性があるが、その形跡をみつけることができない。」と記したが、やはり熱田にいたのではないか。前項の『三庄太夫読切話』に「尾陽狗々山人」とあるし、後述の咄本『成田屋評判寿海老』（本年の刊行か）は、本年の名古屋における七代目団十郎の人氣に乗じた名古屋版らしいからである。父親が死んでいることでもあり、確たる証はないが、この頃名古屋にいた可能性は高い。

◎是歳 合巻『花山吹百人女郎』刊か。

未見。『挿絵節用』によれば、種彦作、豊国画で本年の刊というが、本作は文久三年刊という広告（年譜本編文久三年「是歳」の項参照）が別にある。またこの時期に種彦を名乗るということからしても不審である。

◎是歳か 咄本『成田屋評判寿海老』一冊刊。

石田元季氏「成田屋評判寿海老」（『紙魚』第三冊・四冊、後『劇・近世文学論考』所収）に解説と復刻（『紙魚』第三冊）には七代目団十郎自筆版下の発句部分の写真一枚をも掲載がある。笠亭仙果序で、雀賀楼作、南生舎の画とあるが、いずれも仙果の別号であろうという。名古屋での七代目団十郎の人氣に乗じた作品であることは一読して明かで、おそらくは名古屋版（版元不明）であろう。名古屋での七代目は本年に

おいて全く沸くような人気であったという。即ち、大阪からもどる途中の七代目は、本年五月四日から名古屋若宮芝居に出演し、閏七月一日からは江戸から来た八代目と同座にて共演している。七代目が名古屋の芝居に出たのは本年だけでなく、嘉永三年と同五年七月にも来ているので、本書の刊行を本年とは特定できないかもしれないが、その人気においては、本年が最高であったらしい。すると本書の刊行もやはり本年か。内容は、「名古屋の話」「福の神」「最負」「代々のいさほし」「のぼり鯉」の五話。

◎是歳以後 合巻『松浦船水棹婦言』の改算本刊。

向井信夫氏より御所蔵本をお見せいただいた。本合巻初編より三編までの六十丁を元の板木を流用しつつ四十六丁一冊にまとめたもの。表紙に「松浦船水棹婦言」「読切 上」とあり、見返しには「仙果録」「国久画」とある。紅英堂鳥屋吉蔵板。本合巻三編は本年の刊行なので、右改算本の刊行もこれ以後ということになる。

安政二年 乙卯 五十二歳

◎正月 合巻『菜種花双蝶々』刊。

「嘉永乙卯初春 笠亭主人」序。刊年月はこれによる。国輝画、栄久堂山本平吉板。本書は別に序の年代を「安政庚申孟春」と改めた後刷本がある。本年の板の存在は向井信夫氏の御教示による。

◎五月二十八日 清流亭西江を会主とする狂歌会がこの日開かれて、『狂歌茶器財集』一冊として刊行され、仙果の詠も三首入集する。

内題「狂歌茶器財画像集」。見返しによれば、撰者は竜廻門梅明、傍廻門久根、安満廻門都竜の三人で、口絵一立斎広重、画像一猛斎芳虎画、会主清流亭西江、取重は春友亭梅彦、差添は都錦園久住、彫工は江川錦二である。「安政二」とし卯月

天満潤 都竜「序。巻末に「当座 能扇 花屋大人撰」「当座 雨 中水鶏 雲間園主人撰」の各六首を収む。次いで「安政二乙卯 歳五月二十八日橋場／於別荘開卷寄歌四千五百余首／作者 五百五十余人／清流亭蔵」とある。

兼茶摘并二茶銘 茶器類 其外茶ニ寄品何ニ不依

おこたりて新茶摘つゝいねむれハ匂ひハ鼻を通すこより葉

広道

色も香もいつれを分ん茶摘女の葉向えらミつ喜せん山吹

広道

折鷹とならんこのめをうたてしな少女ハ爪を立つゝそつむ

広道

○七月 関根只誠、二世伊藤燕凌追善集『花火売』を編み、仙果も一首入集する。

延広真治氏の御教示による。関根文庫の所蔵で安政二年初秋とある由。「此秋は誰か手にふれん捨てられてはり合もなき張扇かな 笠亭仙果」とあるという。

※十月四日 国学の師本居内遠没。享年六十四歳。

◎十二月 切附本『朝貞物語』一冊刊。

向井信夫氏御所蔵本と三康図書館所蔵本を一見した。序題「牽牛花実記」。「柳々風土」序。国郷画、松林堂藤岡慶治郎板。刊年月は「柳々風土」という号を「乙十二」の改印による。なお三冊本の明治刷りがある。

安政三年 丙辰 五十三歳

○夏 雑著『おし花』二十八編一冊執筆。

引用書目左の如し。

『蒙求和歌』『風璞』『諸国の紙類』『万金産業袋』『重色目』『婆心録』『天文候鑑』『釈迦心化略』『泣瓢集』『矢立墨』『尾陽年中行事』

安政四年

丁巳

五十四歳

○三月 雜著『おし花』二十九編一冊執筆。

引用書目左の如し

『前句笠付いかりづな』『俳諧新雪みとり』『俳諧俄雨』『俳諧塗笠』『崑山集』『安永三年人数ども』『中古風俗志』『詩本草』『秉穗録』『延喜式神名帳頭註』

本書三十編一冊は年代不明なので、引用書目をここに併記しておく（一部「稲乃舎」と柱に刻された用紙を使っている）。

『外記日記』『菅家御文章』『湖月抄』『太平記』『砂石集』『保元物語』『月令広義』

この三十編に次ぐ一冊は編数も年代も不明なので、これもここに引用書目を記しておく。

『船上録』『兼山記』『水谷記』『備中兵乱記』『勢州軍記』『鴻台戦記』『伊勢峯軍記』『清正記』『武道伝来記』『御前義経記』

安政五年

戊午

五十五歳

※二月 大坂の楠里亭其案、仙果に書簡を送る。

『よしなし言』十三編による。「楠里亭老人書簡中さし入れたる小紙に」として、大阪にないものと江戸にないものを列記している。末に「安政五二月」とある。

◎春 狂歌『狂歌三河名勝図会』一冊が刊行され、仙果の詠一首入集。

見返しに「名古屋書屋一号 百樹園大人撰／同（名古屋）綴翁高雅画／琵琶老翁撰」とあり、また「安政三丁巳年」に三陽の便游舎折主、便原亭広城、便財亭島也の三人が輯めたものであることが記されている。「安政五とせといふ年の弥生さゝのやのあるし樹の寛持」序。巻末に「安政五年午春刻或 三陽 琵琶連蔵板」とある。

三ヶ寺

名にしるき寺ハ磁石の針さきや北をさしたる梅もかをりて

同（名古屋）広道

仙果は安政三年に名古屋へ一度帰っているのので、その時の詠であろうか。

◎四月 切附本『朱達磨縁起』一冊刊。

三康図書館所蔵本を一見した。刷付表紙には右書名の他、「国久画」とある。序文末「招禄稗官醉言」。刊年月は「招禄」の号と「午四」の改印による。松林堂藤岡屋慶次郎板。

▲九月又は冬 名古屋の平出順益に書簡を送る。

『鏗痴集』所収。日付なし。柳下亭種に所蔵の『笑妄集』を見せてもらはずになつていたが、実現しないままに種員がコレラで死んだこと、その死後友人豊芥に頼み種員の書函を調べてもらったところ、函数四十ほどもあったが十に九はからであつたことなどが記されている。種員が没したのを八月廿日頃」と記していることからすると、九月から冬にかけての頃の書簡であろう。仙果はとかく種員と仲が悪かつたようので、平出鏗次郎氏も弘化三年八月十三日付平出順益宛仙果書簡の解説で

種員の文盲（書簡中に「種員文盲でこまり入候」とある）、広道の眼から見たらばさもあらん、然し広道とかく種員を悪くいふ癖あり。こは柳亭の同門にて種彦没後相下らざりしにやらん。世には種員の方或は名あるべきか。そは白縫物語の作ある故なるべし。広道も余が家に来りし時などに「種員の白縫物語は作に毫も感伏せねど、芝居などでやらせるから世間で八釜しくいふうやうになつた」とこぼし、自分では根源実紫を自慢せし由を聞けりと記している。

安政六年

己未

五十六歳

○三月以前天保十二年以後 師種彦著『足薪翁百』、『足薪翁後百』の一本を所蔵し、そこに書入れをする。

仙果は本年三月二十六日付平出順益宛書簡の中で、柳亭種秀と改号することが決まったことを記している。『笠亭仙果』の号を使用している自筆本類はすべてこれ以前の成立と思われる。さて東京教育大学附属図書館所蔵『足薪翁百』三卷三冊（上が後百、中・下が百、中・下に当る）は名古屋の友人神谷三園の書写本で、下巻末に「右仙果翁ノ本ヲ以テ写之 三園」とある。ということは、百、上巻だけは問題が残るものの、とにかく仙果所持本が存在したはずである（現在所在不明）。また三園は「仙果云」という書入れも写していることから、書入れが施されたのは本年三月以前である。上限については、後百の「水車の小歌」の条本文に「天保辛丑の今」とあって、これが天保十二年であることから、仙果の書入れはこれ以後のもと思われる。掲出二書の諸本間の問題等については、『大東急 記念文庫 善本叢刊 随筆集』における長谷川強氏「解題」に詳しい。

◎是歳以前 往来物『稚絵抄』一冊刊。

未見。『国書総目録』によれば、「実語教童子教」という角書があり、徹斎主人（仙果の別号）述、笠亭主人注釈という。笠亭仙果の号が見える刊行書は本年が最後であるので、本年以前の刊である。また角書から察するに、ともに嘉永五年刊の『実語教稚絵解』と『童子教稚絵解』を一つにしたもの、またはそのダイジェスト版ではないか。『童子教稚絵解』巻末に「さてこの活版の童子教は実語教とあはせて一冊なり府下の友人千束菴の所蔵にて類本をみぬ珍書なり」とあることからそう思われる。

◎同 合巻『夏野花味狭藍』初二編刊。

未見。「紙魚」第二冊に石田元季氏所蔵二編下冊の草稿写真一枚が「笠亭仙果自筆稿本」として掲載されており、その「編輯後記」によれば、上板の折の版元は栄久堂山本平吉で、画は豊国であるという

◎同 伏裏「浅草駒形町東側極製五もく鮓」「浅草北馬道松本屋平兵衛 サ、巻 松のすし」を書く。

「本道楽」第二十三巻六号所収。笠亭仙果の名で記している。

万延元年

庚申

五十七歳

○八月十三日 雑著『おし花別集』三冊を記す。

奥に「塙検校イロハ分鈔録より摘出したるにてまた本書あたりなし 万延元八十三」とある。「攷古斎鈔本」と刷られた野のある用紙を使っている。

◎是歳以前安政元年以後 教訓物『実語教稚絵解』一冊刊。

嘉永五年版の再版。題簽に「再版」と刻され、また書名の左右にそれぞれ「心学□□」「幼童手引」と小さく刷られている。見返しには「橋本蘭齋註釈／五雲亭貞秀画」とあり、仙果の名はどこにも見当たらない。栄久堂山本平吉板。

◎是歳以前前年三月以後 誠忠義臣銘々伝 三冊刊。

この書については年譜本編に掲載済みだが、その折に『赤穂義士銘々伝』と同本かと記した。その後一本を架蔵することができ、それによれば、袋（芳幾画）に「赤穂義士銘々伝」とあって同一本である。

◎同 『和漢英雄百人一首』一冊刊。

「種秀」の名があるによりここに掲出する。本書は嘉永六年正月刊『和漢忠孝百人一首』の解題改竄本である。外題は書名の「和漢」を角書とする。「……一友人仙果が留守の間に発兌いそぐ錦耕堂に……蝌斗子」序。貞秀画、錦耕堂山口屋藤兵衛板。改印は「馬込」「浜」「丑正」。柱「忠孝」（ただし口絵

三丁分は「忠孝百人」)。全五十二丁。なお篠崎和子氏〔跡見学園短期大学図書館蔵〕『異種百人一首目録』(『跡見学園短期大学紀要』九)によると、嘉永二年己酉正月刊となっているが、種秀襲名の時期から考えて不審。

文久元年

辛酉

五十八歳

○十一月 雑著『おし花』編数不明編一冊執筆。

引用書目左の如し。

『狂雲集』『続狂雲集』『西鶴文反古』『新刻役者綱目』『宝物集』『男色大鑑』『北窓瑣談後編』『俳諧知恵袋』『俳諧続桑岡集』『俳諧二昔』『宗長日記』

◎是歳『現古俳家價録』刊か。

未見。東京大学附属図書館酒竹文庫所蔵の一枚刷りに、「文久元新刻」「柳亭大人著」「東都 月花堂蔵板」として見えている。年譜本編の本年に掲出した『新書画價録』と同じものか。

文久二年

壬戌

五十九歳

○十二月十七日 横井也有の『野夫談』一冊を待買堂より送られ、識語を記す。

早稲田大学図書館所蔵。書題簽に「也有翁野夫談」とあり、その横に「高橋仙果筆本」と墨書。奥に

横井也有〔名時般一名並明、又名順寧也、有と号也〕／又号暮水蘿隱遯窩知丙亭半掃菴俗

称／孫右衛門二千石天明三年癸卯六月十六日卒八十二／尾

州藤瀬西音寺葬／右一卷以安芸安井正順藏本写／文政

八年乙酉皐月 有明／嘉永元年戊申十一月十九日写竟

とあって、裏表紙の見返しに

右野夫談一冊待買堂五一所贈／文久二年臘月十七日 轍斎藏
と墨書。

文久三年

癸亥

六十歳

○春 合巻の草稿『紫草紙』二冊を執筆し序を記す。

本書年譜本編に掲載すみだが、『根源実紫』十六編の草稿である。この編刊否未詳。

▲八月二十七日または本年以後の同月日 柳橋柳屋で三題嘶の会を催す。

東京都立中央図書館東京資料所蔵の『三題一口嘶興画集』に付された刷物二枚による。一枚は「葉月廿七日 三題はなし」とあって、其水、有人、綾岡、円朝、魯文、如阜、むらく、扇夫、交来、芳幾、談志、左楽、玄魚の名があり、それぞれの上に三題を記す。また当日開巻する余興の三題一口嘶を募っていて、春廻屋と麟堂の両大人評、題は秋の季、人物、道具類の三題である。「催主 柳亭種彦」と見えている。いま一枚には「三題落語 粹狂連」とあって、梅素、芳幾、如阜、交来、甘水、魯文、種彦、扇夫、有人、綾岡の名と、その上にそれぞれの三つの題が記されている。種彦の上には「梅若忌／茶臼／つわり病」とある。仙果が粹狂連に加わって三題嘶を始めるのは本年春頃からであることを考慮して掲出した。本資料は佐藤悟氏の御教示による。

慶応二年

丙寅

六十三歳

○五月 雑著『おし花』編数不明編一冊執筆。

引用書目左の如し。

『続日本紀』『守武千句』『江戸八百韻』『尾張戲場事始』『紅梅千句』『千句塚』『雑巾』『七百五十韻』『塩尻』『武江年表』『北越雪譜』『宗遍流茶の花の本』『睡余小録』『古刀銘尽大
全』

明治元年

戊辰

六十五歳

▲二月九日 没。

墓は本所の東盛寺にも熱田白鳥の成福寺にも現存していない

ことを、年譜本編で記したが、四世絵馬屋額輔の自筆編著『狂歌奥都城図誌』（明治二十四年八月自序、岩瀬文庫蔵）に、東盛寺のものが書き写されていた。「^世浅草庵笠亭仙果墓」として「本所中ノ郷原庭町東盛寺ニあり」「高サ二尺余小形ナリ紋立花」という説明が付されている。



ここで、仙果の自筆本、書入れ本等で年代末詳のものをまとめてあげておく。

愛兄隅田川 一冊

岩瀬文庫蔵。自筆本。

一霞稿 一冊

『尾三歌書年表』による。自筆稿本草稿。

一蝶流謫考 一冊

国会図書館蔵。京山自筆本を仙果が転写したもの。

宇津保物語見出し 一冊

「弘文莊待買古書目」十七号（昭24・4）による。自筆草稿で、「半紙判十三行、細字。俊蔭とたゝこそその二巻につき語彙を集め、丁数を記し、稀れに注釈を加ふ。墨

付紙数十四丁、他に『春日諸歌題』及び『客齋皇子』の項の妙文を抄出せり。紙数十四丁、黒川真頼翁旧蔵本」とある。水野清氏の御教示による。

江戸童遊集

『若樹文庫収得書目』の『尾張童遊集』（小寺玉晃自筆稿本）の項に、「仙果ニ江戸童遊集の著述あり共ニ其著述を交換せんとし玉晃翁自身清書して仙果ニ送りて約を果せしてが如何なる訳か仙果よりハ遂ニ其著江戸童遊集ハ送り来らざりき」という。

小野小町略伝 一冊

無窮会神習文庫蔵。自筆稿本。内題下に「高橋広道關扉考證三十之」とある。

花街之図 一冊

国会図書館蔵。浮世草子等の挿絵を写したもの。自筆稿本。

菓子考 一冊

『竹清藏書目録』による。自筆本。

春日臨時祭記 一冊

「浅倉屋古典籍目録^{辛未}」（昭6・11）に「影写本黒川春村自筆」「高橋広道書入」とある。延広真治氏の御教示による。

狂言小舞譜 一冊

岩瀬文庫蔵。自筆本。

金紋志得抄 一冊

国会図書館蔵。自筆稿本。用紙柱には「楽寿楼藏書」と刻されている。

好色一代男 八冊

国会図書館蔵。巻二、五のみ仙果自筆書写、他は版本。自筆書入れ。

西鶴大矢数 四冊

東京大学附属図書館酒竹文庫蔵。自筆本。

神社抄 一冊

国学院大学附属図書館蔵。自筆本。

千秋万歳式文 一冊

国会図書館蔵。自筆書写の校訂本。

玉文匣 二冊

国会図書館蔵。自筆本。一冊目扉には「百花籠」とも。

知多万歳集 一冊

大東急記念文庫蔵。刊本。校合を中心に仙果書入れ。

菟玖波集 四冊

岩瀬文庫蔵。初代種彦自筆本で、二代種彦の校訂書入れ。

剝野良 一冊

国会図書館蔵。自筆本。

ぶん太もの語 一冊

東京大学附属図書館蔵。刊本。下巻第九丁目表裏とも仙果補写。

野良三座託 一冊

国会図書館蔵。自筆本。

野良虫 一冊

国会図書館蔵。自筆本。

用舍箱

関根文庫蔵。仙果手沢本との延広真治の御教示である。

吉原大豆俵評判 一冊

岩瀬文庫蔵。自筆本。

類聚雑要抄 三冊

『竹清蔵書目録』に「高橋広道書入」とある。

明治二十四年

辛卯

没後二十三年

※初秋 四世絵馬屋額輔、狂歌師の墓を巡り歩いて狂歌を詠み、それを『狂歌掃墓一首』にまとめて序を記す。この内に仙果についての詠も出る。

岩瀬文庫所蔵の自筆本による。「明治はたとせあまり／四とせといふとしの／桐ひと葉散り／そむる頃／絵馬屋主人」序。

笠亭仙果 同（本所） 東盛寺

香華の跡さへ絶てとふ人もありません果のあわれ奥つき

（昭58・12・10）